

『南山神学』41号（2018年3月）pp. 1-20.

## なぜヨセフへの告知は夢によるのか —マタイ福音書における夢の実現と預言の成就—

柗 暁生

### はじめに

マタイ福音書のはじめに、イエス・キリストの系図が書かれてあり、それに続いてイエス・キリストの誕生物語が記されている。マタイはルカとは異なり、イエス誕生の告知を女性のマリアにではなく、男性のヨセフにしている。ルカでは神の使いがイエスの誕生をマリアに直接に告げるが、マタイでは主の使いが夢でヨセフに現れてイエスの誕生を間接に告げる。それに続いて、エジプトへの避難からイスラエルへの帰国までの指示がヨセフに夢で告げられる。1章から2章にかけて、夢での告知は4回にわたる<sup>1</sup>。なぜマタイではこのように夢が強調されるのか。本稿で我々は、これが旧約のヨセフの夢にもとづいて、新約のイエスを預言の成就と見なすために書かれたものであるということを検証してみたい。

### 1. ヨセフの夢（マタイ 1-2章）—新約聖書—

#### 1. 1. マタイ福音書における夢

旧約聖書では、ヘブライ語の名詞「夢」(חלום/ハローム)が60回<sup>2</sup>、動詞「夢

---

<sup>1</sup> 但し、R.E.ブラウンは同じ「見よ」で始まるパターンの1:20,2:13,19の3回とし、2:12と同じ「夢で警告され」で始まるパターンの2:22は夢での告知の数に入れない。R.E. Brown, *The Birth of the Messiah* (New York 1977) pp.50,110,117. 参照。彼は通時的な観点から、後者を補足的な神的告知とし、前者の3カ所のみを pre-Matthean として分析する。本稿は共時的な分析によるもので彼の考察とは異なる。

<sup>2</sup> TDOT p.427. 但し、NIDOTE .vol.2 (p.154)は65回とする。

を見る」(ὄρα/ハラム)が24回<sup>3</sup>使われているのに対し、新約聖書では、ギリシア語の名詞「夢」(ὄναρ/オナル)がマタイ福音書に6回出て来るが、それ以外において新約聖書で夢(オナル)は用いられておらず<sup>4</sup>、他の一、二の語が使われているだけである<sup>5</sup>。それほど新約聖書において夢は重要な位置を占めていない。しかしながら、マタイはイエスの誕生物語において夢に特に重要な役割を持たせている。すなわち、マタイ 27:19 の1回<sup>6</sup>を除いたあとの5回は、すべてイエスの誕生物語に出て来るのである。そのうちの1回は東方からやって来たマギたちにおいてであるが、あとの4回はすべてヨセフにおいてである。ヨセフにおける夢による告知とはいかなるものであろうか。

## 1. 2. 誕生物語における「夢による告知」

### ① 定型句「夢による告知」の配置

イエスの誕生物語において、「夢による告知」の定型句は以下の五か所にステレオ・タイプの的に出て来る<sup>7</sup>。イエスの誕生を告知する 1:20 は用語法としては、B, B'と同様であるが、誕生物語全体の文学的構成からすれば、これを除いた他の四カ所が、A・B・B'・A'のキアスムスで形成されていると見るのが妥当であると考えられる。

X 1:20 見よ、主の使いが夢で彼に現れて言った。

A 2:12 ところが、夢で警告され、～自分たちの所に退いて行った。

B 2:13 見よ、主の使いがヨセフに夢で現れて言った。

B' 2:19 見よ、主の使いがエジプトにいるヨセフに夢で現れて、(20)言った。

<sup>3</sup> TDOT p.427.但し、NIDOTE .vol.2 (p.154)は27回、アラム語ヘレム(ダニエル)22回とする。

<sup>4</sup> LXXでは「夢」のためにὄναρは用いられず、ἐνυπνίονが使われ、ἐνυπνιάζομαιが動詞として「夢を見る」を言う。

<sup>5</sup> 新約聖書ではὄναρの他、ἐνύπνιον(使2:17)、ἐνυπνιάζομαι(使2:17.ユダ8)、ὄραμα「幻」(使16:9,10.18:9)などの語が出て来る。

<sup>6</sup> 「一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。『あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。』」(マタイ27:19)

<sup>7</sup> TDNT vol. V.p.235.ὄναρ,B.The Dream in the New Testament.しかしマタイ1-2章のヨセフの夢の記事が旧約のヨセフ物語に基づくことにはまったく触れられていない。

A' 2:22 ところが、夢で警告され、ガリラヤ地方に退いて行った。

[ギリシア語原文]

X 1:20 ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου κατ' ὄναρ ἐφάνη αὐτῷ λέγων,

A 2:12 καὶ χρηματισθέντες κατ' ὄναρ μὴ ἀνακάμψαι πρὸς Ἡρώδην,

B 2:13 ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου φαίνεται κατ' ὄναρ τῷ Ἰωσήφ λέγων,

B' 2:19 ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου φαίνεται κατ' ὄναρ τῷ Ἰωσήφ ἐν Αἰγύπτῳ.

A' 2:22 χρηματισθεὶς δὲ κατ' ὄναρ ἀνεχώρησεν εἰς τὰ μέρη τῆς Γαλιλαίας,

② 定型句「夢による告知」

「夢による告知」の定型句には一定のパターンがある<sup>8</sup>。

(i) 夢の導入句: 小辞「ところが」(δὲ) と, 分詞構文が夢を導入(徐く A,A')。

X 1:20 「このように考えていると」 ταῦτα δὲ αὐτοῦ ἐνθυμηθέντος ἰδοὺ

B 2:13 「彼らが退いて行くと」 ἀναχωρησάντων δὲ αὐτῶν ἰδοὺ

B' 2:19 「ヘロデが死ぬと」 τελευτήσαντος δὲ τοῦ Ἡρώδου ἰδοὺ

(ii) 夢: すべて「夢で」(κατ' ὄναρ) という同一語句。二種のタイプがある。

A タイプ : 現れる (φαίνω) = 「彼に」(1:20), 「ヨセフに」(2:13,19)

B タイプ : 警告する (χρηματίζω) = 複数形 (2:12), 単数形 (2:22)

(iii) 言葉の導入句: 分詞「言った」(λέγων) が告知の言葉を導入(除く A,A')。

(iv) 告知の言葉: 主の使いの告知の言葉が記される(除く 2:2)。

(v) 告知の実行: 夢での告知が実際に実行されたことが述べられる。

### 1. 3. 「夢による告知」の実行

さて、夢で告知されたことはどうなるのか。マタイ福音書ではそれらはことごとく実行される。2:22 には夢で告知される言葉は記されていないが、夢の中で告げられた言葉とその実行の対応関係は以下のとおりである。

<sup>8</sup> R.E.ブラウンは、主の使いが現れる A タイプ(pre-Matthean)だけに絞ってパターン<sup>4</sup>の4要素をあげる。前掲書 108 頁参照。

- X 言葉 1:20-21 妻マリアを迎え入れよ。その子の名をイエスと呼びなさい。  
 実行 1:24-25 自分の妻を迎え入れた。その子の名をイエスと呼んだ。
- A 言葉 2:12a ヘロデのもとへ帰るな。  
 実行 2:12b 自分たちの所に退いて行った。
- B 言葉 2:13 起きて、子供とその母を連れ、エジプトに逃げ、  
 実行 2:14-15 起きて、子供とその母を連れ、エジプトへ退いた。
- B' 言葉 2:20 起きて、子供とその母を連れ、イスラエルの地に～。  
 実行 2:21 起きて、幼子とその母を連れ、イスラエルの地へ～。
- A' 言葉 2:22 なし  
 実行 2:22 ガリラヤ地方に退いて行った。

## 2. ヨセフの夢（創世記 37-50 章）—旧約聖書—

### 2. 1. ヨセフ物語（創世記 37-50 章）における夢

創世記のヨセフ物語（37-50 章）は、夢でもって開始され、その夢の実現に向かって展開されてゆく。はじめにヨセフは二回夢を見て、兄弟、そして父に語るが、それによって兄弟に妬まれ、殺されそうになる（37 章）。危うく命だけは助けられてエジプトに売られることになるが、今度はエジプトでポティファルの妻の讒言によって牢に入れられる（39 章）。ヨセフは入れられた牢の中でファラオの二人の家臣の夢を解き、一人は死に、一人は生き残ることとなる（40 章）。その後ファラオの夢を解き、凶作と豊作が七年ずつ起こることになると告げ、ヨセフは牢から解放されて、ファラオの高官となる（41 章）。その後、全地で飢饉が起こり、兄弟たちが穀物を買いにエジプトに来るが、そこからヨセフとその兄弟の物語が大きく展開されることになる（42 章）。最後にはヨセフと兄弟との和解がなされるが（43-45 章）、こうしたことは、ヨセフ自身が見る二回の夢、そしてヨセフが解き明かす二人の家臣の二つの夢、ファラオの二つの夢、それらが大きな機縁となっているということである。創世記ではヨセフは 2 回夢を見るが、マタイではヨセフはその倍の 4 回夢で告知を受ける。

- 創 37 章 ヨセフの夢 (2 回) → 夢の解き明かしはない  
 創 40 章 給仕長と料理長の夢 (2 人) → ヨセフによる夢の解き明かし  
 創 41 章 ファラオの夢 (2 回) → ヨセフによる夢の解き明かし

## 2. 2. ヨセフの夢－創 37 章－

創 37:5-11 にかけて、ヨセフが 2 回夢を見て最初は兄弟に、二回目は父と兄弟にそれを語るという記述があるが、そこでは動詞「ひれ伏す」(חָהָה)が 3 回出てくる。ヨセフの夢の中心的なメッセージは「ひれ伏す」ということである。

(1) 第 1 の夢 (37:6-7) 「私が見た夢の話を聞いてください。私たちが畑の中で、麦の束を結わえていると、いきなり私の束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、あなたがたの束が周りに集まって来て、私の束にひれ伏しました。」

(2) 第 2 の夢 (37:9) 「私はまた夢を見ました。なんと、日と月と 11 の星が私にひれ伏していたのです。」

(3) 父の言葉 (37:10) 「お前が見たその夢は一体何なのだ。私やお母さん、兄弟たちが、お前にひれ伏すとてもいうのか。」

ヨセフは 2 回夢を見る。最初は畑 (地) で兄弟の束がヨセフの束にひれ伏し、二回目は、空 (天) で日と月と 11 の星がヨセフにひれ伏すという夢である。二つの夢に共通するのは、「ひれ伏す」という動詞である。そして二回目の話を聞いた父親は、「お前が見たその夢は一体何なのだ。私やお母さん、兄弟たちが、お前にひれ伏すとてもいうのか」と述べる。動詞「ひれ伏す」は、父親の言葉の中でも用いられており、37 章の夢の物語の中で合計三回出て来る。ヨセフ物語では、この夢のとおり、実際に畑で兄弟の束がヨセフの束にひれ伏すということも、天で日と月と 11 の星がヨセフにひれ伏すということもない。これは象徴的な夢として記述されているわけで、ここで大事なものはヨセフに「ひれ伏す」ということである。夢の中で三回予告されている「ひれ伏す」という行為は、ヨセフ物語の後半になって、実際に三回実行され、それは現実のものとなる。

### 2. 3. ヨセフの夢の実現—創 42,43 章—

カナンの地でのヨセフの夢の中で三回述べられていた「ひれ伏す」という言葉は、実際にエジプトの地で実行されることになる。兄弟は、エジプトで高官になっていたヨセフが、弟のヨセフとは気づかず、ヨセフの夢のとおり三回「ひれ伏す」という行為をするのである<sup>9</sup>。

42:6 「ヨセフの兄弟はやって来て、顔を地に付け、彼（ヨセフ）にひれ伏した」

43:26 「彼らは～贈り物を差し出し、地に向かって、彼（ヨセフ）にひれ伏した」

43:28 「父は元気でまだ～」と答えて、ひざまずき、彼（ヨセフ）にひれ伏した」

動詞「ひれ伏す」の対応関係

第一の夢（37:7） → 一回目の「ひれ伏す」（42:6）

第二の夢（37:9） → 二回目の「ひれ伏す」（43:26）

父の言葉（37:10） → 三回目の「ひれ伏す」（43:27）

### 3. 二人のヨセフの夢—旧約聖書と新約聖書—

上述したように、ヨセフがカナンの地で見た夢の「ひれ伏す」は、現実にエジプトの地で実現される。マタイ福音書においては、イエスとの関係で「拝む」（προσκυνέω）<sup>10</sup>という動詞が三回用いられており、その三回目ではイエスに対する「拝む」行為が実際におこなわれる。同じ名前ではあるが、異なる人物である旧約と新約の二人のヨセフについて、マタイはなぜ旧約のヨセフの夢の物語をもとにして新約のヨセフの夢の記事を叙述したのか。ここで旧約と新約に共通する事柄を見てみよう。

<sup>9</sup> 拙稿「夢見る者の夢—ヨセフの夢の文学的構造（創世記37章5節～11節）」、『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第4号、17-41頁参照。その他にも、ヨセフ物語において動詞「ひれ伏す」は3回出て来る。47:31.48:12.49:8.

<sup>10</sup> ギリシア語動詞「拝む」（προσκυνέω）はヘブライ語動詞「ひれ伏す」（חנה）に対応する。E.Hatch, H.A.Redpath, *A Concordance to the Septuagint* (Michigan 1998)1217-1218. 参照。旧約のヨセフに対しては人間であるので「拝む」ではなく、「ひれ伏す」という訳語を当てる。

### (1) ヨセフの父=ヤコブ

旧約聖書におけるヨセフの父親の名前はヤコブである。或いは同一人物であるが名前の異なるイスラエルである。それに対し、新約聖書におけるヨセフの父親の名前は、マタイではヤコブ、ルカではエリと異なる。福音書においてヨセフという人物は何人か登場する。ただイエスの母マリアの夫ヨセフに関して記述があるのは、マタイとルカだけである。ヨセフの名はマタイに7回<sup>11</sup>、ルカに5回<sup>12</sup>出て来る。しかしながら、両者が異なるのはその父親の名前である。

マタイ 1:16 「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。」

ルカ 3:23 「イエスはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子、」

マタイはヨセフの父親の名前をヤコブとし、ルカはエリとする。マタイと同じようにヨセフの父親の名前がヤコブというのは、聖書の中では創 30:22 以降に記されているラケルとの間に生まれたヨセフのみである。マタイによるヤコブとヨセフの父子関係は、創世記のヤコブとヨセフのそれに合致する。そして創世記のヨセフ物語が夢を見ることによって始まるように、マタイのイエス誕生物語もヨセフが夢で告知を受けることから始まる。

### (2) 動詞「ひれ伏す/拝む」

創 37 章のヨセフの夢の話の中では、動詞「ひれ伏す」((חזה)) が 3 回出て来る。それに対し、マタイ 2 章のイエスの誕生物語の中でも、動詞「拝む」(προσκυνέω) が 3 回出て来る。創 37 章の夢の話の中でヨセフに「ひれ伏す」ことが 3 回言われ、それが創 42-43 章において実際に 3 回実行される。マタイの場合には、夢の中で「拝む」ということは言われていないが、動詞「拝む」がイエスとの関係で 3 回使われている。

マギたちが星に導かれてエルサレムにやって来たのは、イエスを「拝む」ためであると記され、ヘロデも行って「拝む」と述べられている。ただ実際にベトレヘムに行ってイエスを拝むのはマギたちだけである。ここでもヨセフ物語と同様、最終的に拝むことが実現する。両者の相違は、「ひれ伏す/拝む」対象

<sup>11</sup> マタイ 1:16, 18:19, 20, 24:2:13, 2:19.

<sup>12</sup> ルカ 1:27.2:4, 16.3:23.4:22.

が旧約ではヨセフであるのに対し、新約ではイエスであるという点である。

また、マタイ福音書で星に導かれてと記されているのは、創 37:9 に書かれている 11 の星，すなわち 11 人の兄弟に対応すると考えられる。創世記では言ってみれば悪い意味で兄弟がヨセフをエジプトへと導くのであるが<sup>13</sup>，ヨセフはそれを神が導かれたのであると解釈する（創 45:4～5）。

### （3）カナンからエジプトへ

創世記37章では、ヨセフは樹脂、乳香、没薬を積んだイシュマエル人の隊商によってエジプトに連れて行かれてしまう。そしてヨセフは生涯エジプトにすることになる。他方、マタイ2章では、マギたちがイエスに、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた後、「ヘロデのところへ帰るな」と夢で警告されたので、別の道を通って自分たちの所へと退いて行く(ἀναχωρέω)。彼らが退いて行く(ἀναχωρέω)、主の使いが夢でヨセフに現れ、「起きて、子供とその母を連れて、エジプトに逃げ、私が告げるまで、そこにとどまっていなさい」と告げるのでヨセフは起きて、幼子とその母を連れてエジプトへと退き(ἀναχωρέω)、ヘロデが死ぬまでそこにいることになる。旧約のヨセフも、新約のヨセフも、危機の状況にあってカナンの地からエジプトの地へと行くことになる。一人は強制的に連れられて行くわけであるが、もう一人は避難するために逃れて行く。

### （4）エジプトからカナンへ

創世記では、ヨセフはエジプトに連れて行かれてから死ぬまでエジプトに滞在し、直接的にはエジプトからカナンの地へ戻るということはない。しかしながらヨセフは死ぬ前、自分が死んだ後には自分の骨を携え、この地からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に上って行ってくれと息子たちに言い残す。そこで、その骨はモーセによって携えられて行き（出 13:19）、エジプトを脱出した後、ヨルダン川を渡ってカナンの地へ入り、シケムの地に埋葬される（ヨシ 24:32）。間接的ではあるが、ヨセフはエジプトからカナンへと戻って来

<sup>13</sup> マタイ 2:2,7,9,10参照。星はある意味で、以後の夢の役割を果たしているとも考えられる（4回）



ることになる。他方、マタイでは、ヨセフはエジプトへと避難した後、ヘロデが死ぬと、主の使いが夢で現れ、「起きて、子供とその母を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは死んでしまったからだ」(マタ 2:20-21)と告げられ、母子ともどもイスラエルの地へと帰って行く。これは出 4:19-20 の七十人訳とほぼ同じで、出エジプト記のモーセが暗示されている。そして最後には夢での警告によってガリラヤ地方に退いて行く(ἀναχωρέω)。旧約のヨセフの場合は骨であるので間接的ではあるが、新約のヨセフは、エジプトの地からカナンの地、イスラエルへと戻ることになる。

#### 4. 「預言の成就」—マタイ 1-2 章—

##### 4. 1. 誕生物語における「預言の成就」<sup>14</sup>

###### ① 定型句「預言の成就」の配置

イエスの誕生物語において、「預言の成就」の定型句は、それとは関係のない 2:5 を除き、A・B・B'・A'のキアスムス形式で構成されている<sup>15</sup>。

- A 1:22 預言者を通して言われていたことが成就するためであった。  
 X 2:5 預言者を通してこのように書かれています。  
 B 2:15 預言者を通して言われていたことが成就するためであった。  
 B' 2:17 預言者エレミヤを通して言われていたことが成就した。  
 A' 2:23 預言者たちを通して言われていたことが成就するためであった。

[ギリシア語原文]

- A 1:22 ἵνα πληρωθῆ τὸ ῥηθὲν ὑπὸ κυρίου διὰ τοῦ προφήτου λέγοντος,  
 X 2:5 οὕτως γὰρ γέγραπται διὰ τοῦ προφήτου  
 B 2:15 ἵνα πληρωθῆ τὸ ῥηθὲν ὑπὸ κυρίου διὰ τοῦ προφήτου λέγοντος,  
 B' 2:17 τότε ἐπληρώθη τὸ ῥηθὲν διὰ Ἰερεμίου τοῦ προφήτου λέγοντος,  
 A' 2:23 ὅπως πληρωθῆ τὸ ῥηθὲν διὰ τῶν προφητῶν

<sup>14</sup> 原文では「預言者を通して言われていたことが成就する」であるが、便宜上、本稿ではそれを「預言の成就」という用語で表現する。

<sup>15</sup> これについては以下の考察で明らかにされる。

## ② 定型句「預言の成就」

「預言の成就」の定型句には一定のパターンがある。

## 1. 預言の成就

すべて「成就する」(πληρώω)の受動形であり、そのうち2:17のみ直接法アオリスト形で「成就した」<sup>16</sup>、他はすべて接続法アオリスト形で「成就するためであった」と訳される。動詞「成就する」に先行する小辞には異なる三種が使われている。

Aタイプ:「ために」(ἵνα) 1:22, 2:15 [ἵνα 他5回: 4:14.12:17.21:4.26:56]

Bタイプ:「その時」(τότε) 2:17 [τότε 他1回: 27:9]

Cタイプ:「ように」(ὅπως) 2:23 [ὅπως 他2回: 8:17.13:35]

## 2. 「預言者を通して」(διὰ τοῦ προφήτου)

(a) 1:22 と 2:15 には「主によって」という説明が加えられている<sup>17</sup>。

(b) 2:23 のみ複数形であるが<sup>18</sup>、他はすべて単数形である。

(c) 2:27 のみに「エレミヤ」の名前が入っている<sup>19</sup>。

## 3. 「言われていたこと」(τὸ ῥηθὲν) : 「言う」(εἶπον) のアオリスト受動形分詞が名詞としてすべての箇所書かれている。

4. 引用導入句: 属格分詞「次のように言われている」(λέγοντος)<sup>20</sup>が、2:23 以外の三ヶ所で使われている<sup>21</sup>。5. 預言の言葉: すべての箇所ですべての預言の言葉が引用されている<sup>22</sup>。

## 6. 預言の実行: 預言者の言葉が実際に成就することが述べられる。

<sup>16</sup> これに関しては、橋本滋男「マタイによる福音書」『新共同訳 新約聖書注解 I』(日本キリスト教団出版局 1991年) 40頁参照。

<sup>17</sup> 「夢」では「主の使い」がその役割を果たす。1:20, 24:2:13, 19.

<sup>18</sup> 「ナザレ」の引用箇所は明白ではないが、士13:5, 7. イザ11:1. 53:2等、複数の箇所と関係するからと考えられる。橋本滋男, 前掲書41頁参照。

<sup>19</sup> マタイ福音書の中で最後に配置されている定型句「預言の成就」—ユダの死—(27:9) も同じ構文(τότε〜)でエレミヤが引用されている。2:17-18は子供の死であるが、どちらも悲しい出来事の成就である。

<sup>20</sup> 夢での言葉の導入句, 主格分詞「言った」(λέγων)とは異なる。

<sup>21</sup> 2:23はこの代わりに, 小辞「ということ」(ὅτι)を用いる。

<sup>22</sup> 「夢」では2:22において告げられた言葉は記されていない。

#### 4. 2. 「預言の成就」

さて、「預言の成就」と言われる場合、そこではそれに関連する預言の言葉が引用されている。「預言の成就」の定型句と、預言の言葉及びその成就の位置とその対応関係は以下のとおりである。「預言の成就」の定型句でない 2:1-6 を除く他はすべて、成就、定型句、預言の言葉の順である。A と A' は、両者とも預言者の言葉の中で「呼ぶ/名づける(καλέω)」の未来形が使われ—前者は能動形であるのに対し、後者は受動形ではあるが—、イエスに関して、誕生においてはインマヌエル、エジプトからの帰還においてはナザレの人と呼ばれることが言われ対応する。B と B' は、前者が預言者の言葉が「成就するためであった」と言われるのに対し、後者はそれが「成就した」と述べられ呼応する。

A 定型句	1:22	「主が預言者を通して言われたことが成就するためであった」
預言	1:23	「その子の名を人々はインマヌエルと呼ぶだろう(καλέω)」
成就	1:25	「その子の名をイエスと呼んだ(καλέω) <sup>23</sup> 」
X 成就	2:1	「イエスがヘロデ王の～ユダヤのベトレヘムで生まれた時」
	2:5	「預言者を通してこのように書かれています」
預言	2:6	「ユダの地、ベトレヘムよ、～ユダの指導者たちの～ない」
B 成就	2:14-15a	「彼はエジプトへと退き、ヘロデが死ぬまでそこにいた」
定型句	2:15b	「主が預言者を通して言われていたことが成就するため～」
預言	2:15c	「私はエジプトから私の子を呼んだ(καλέω)」
B' 成就	2:16	「ヘロデは～、ベトレヘム～の男の子を、一人残らず殺した」
定型句	2:17	「預言者エレミヤを通して言われていたことが成就した」
預言	2:18	「ラマで声が聞こえた。激しく～。ラケルはその子ら～」
A' 成就	2:23a	「彼はナザレトと言われる町に行って住んだ」
定型句	2:23b	「預言者たちを通して言われていたことが成就するため～」
預言	2:23b	「彼はナザレの人と呼ばれるだろう(καλέω)」

<sup>23</sup> これは厳密には夢の言葉の実行である。「その子の名をイエスと名づけ/呼びなさい」(1:21)

## 5. 「夢の実現」と「預言の成就」

### 5. 1. 第1章：イエスの誕生

1章は、前半 1-17 節のイエスの系図と後半 18-25 節のイエスの誕生の記事の二つに分かれるが、後半の誕生物語の中で、夢での告知と預言の成就是、22 節はじめの「このすべてのことが起こったのは」という言葉できれいに結び合わされている。マタイはヨセフの夢での告知は預言であり、その実行が預言の成就であるとする。夢と預言に共通するのは、「男の子を産む」ということと、「彼の名を～と呼びなさい」という言葉である。

夢 1:20-21 a 定型句 「見よ、主の使いが夢で彼に現れて言った」

b 言葉 「ダビデの子ヨセフ、～妻マリアを迎え入れなさい。

マリアは男の子を産む。

その子の名をイエスと呼びなさい」(2sg.imp.ind.fut.)

結合 1:22a 「このすべてのことが起こったのは」

預言 1:22-23 a 定型句 「主が預言者を通して言われていた～が成就するため」

b 言葉 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む」

その子の名～インマヌエルと呼ぶだろう(3pl. ind.fut.)」

実行 1:24-25 「主の使いが命じた通り、自分の妻を迎え入れた。

しかし、彼女が男の子を産むまでは～。

その子の名をイエスと呼んだ(3sg.ind.aor.)」

### 5. 2. 第2章：マギたちとヨセフ・ベトレヘムとエジプト

#### ① 2章の構成<sup>24</sup>

前半 1-12 マギたち A 1-4 ベトレヘム

B 5-6 預言：ベトレヘム

A' 7-12 ベトレヘム

<sup>24</sup> R.E.ブラウンは前半を 1-6 と 7-12 に分けるが、筆者は前半と後半は以下のように対応するものと見る。前掲書 178-179 頁参照。

後半 13-23 ヨセフ A 13-15 エジプト  
 B 16-18 預言：ベトレヘム,ラマ  
 A' 19-23 エジプト

② 「夢の実現」と「預言の成就」

枠 夢 2:12 マギたち

- a 定型句 「ところが、夢で警告され」
- b 言葉 「ヘロデのところへ戻るな」
- c 実行 「別の道を通して自分たちの所へ退いて行った」

A 夢 2:13-15a ヨセフ

- a 定型句 「見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて、言った」
- b 言葉 「起きて、子供とその母を連れ、エジプトに逃げ、～ヘロデが」
- c 実行 「起きて、幼子とその母を連れ、エジプトへ退き、ヘロデが」

B 預言 2:15b

- a 定型句 「主によって預言者を通して言われていたことが成就するため」
- b 言葉 「私は、エジプトから私の子を呼び出した」

X 2:16 「ヘロデは～ベトレヘム～男の子を、一人残らず殺させた」

B' 預言 2:17-18

- a 定型句 「こうして預言者エレミヤを通して言われていたことが成就した」
- b 言葉 「ラマで声が聞こえた。～子供たちがもういないから」

A' 夢 2:19-23 ヨセフ

- a 定型句 「見よ、主の使いがエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った」
- b 言葉 「起きて、子供とその母を連れ、イスラエルの地に行きなさい」
- c 実行 「起きて、幼子とその母を連れ、イスラエルの地へ帰って来た」

枠 夢 2:22b ヨセフ

- a 定型句 「ところが、夢で警告され」
- b 言葉 「なし」
- c 実行 「ガリラヤ地方へ退いて行った」

## 補遺 預言 2:23

- a 定型句 「預言者たちを通して言われていたことが成就するためであった」
- b 言葉 「彼はナザレの人と呼ばれるだろう」

## ③ 解説

## (i) 前半 2:1-12 マギたち—ベトレヘム往還—

前半は、東方のマギたちが、ベトレヘムに生まれたイエスを拝みにやって来て、拝んだのちは夢によって警告され、来た時とは別の道を通って退いて行くという話である。ここでは真ん中(5-6節)に、預言者が書いている「ユダの地、ベトレヘム」の記事があるが、これは後半(13-23)の預言の成就の定型句とは異なる記述であり、12節の夢での告知とは結びつけられていない。12節はむしろ、後半のヨセフの夢での告知と結びつけられており、13節は「彼らが退いて行くと」という書き出しでそれを引き継いでゆく。異邦人であるマギたちの物語では預言の成就ということはさけられ語られていない。預言の成就是ヨセフの夢での告知と密接に結びつく。

## (ii) 後半 2:13-23 ヨセフ—エジプト往還—

## 1. 中心部分 2:13-21

ヨセフが主役となる2章後半は、A・B・X・B'・A'の集中化構造で形成されている。

- A 夢 13-14 「起きて」→「起きて」
- B 預言 15 成就するためであった(接続法アオリスト)
- X 事件 16-17 ヘロデ:ベトレヘム+嬰兒殺害=ダビド+モーセ
- B' 預言 18 成就した (直接法アオリスト)
- A' 夢 19-21 「起きて」→「起きて」

夢での告知のあと、その実行が記されるが、それは預言の成就なのであると最後に述べられる。「私は、エジプトから私の子を呼び出した」は、この時点ではまだ実行されていないが、その成就を先取りしたかたちでここでは述べられている。

## 2. 枠組 2:12 と 2:22

中心部分を取り囲む枠組は、夢による警告である<sup>25</sup>。

12 節「ところが、夢で警告され、」→「退いて行った」

22 節「ところが、夢で警告され、」→「退いて行った」

ただ、はじめの夢はマギたちであり、おわりの夢はヨセフであって異なる。中心部分の集中化構造とは対応関係が相違する。中心部分はヨセフに関するもので、それ自体で完結した段落である。しかしながら、この 12 節と 22 節の枠組は開かれた文脈の中で、発展的に連繋するものである。すなわち、12 節のマギたちの夢の実行は、13 節のヨセフへの夢の告知につながり、22 節のヨセフの夢の実行、「ガリラヤ地方へ退いた」は 23 節の預言の成就、「彼はナザレトの人と呼ばれるであろう」へとつながる。

12 節 「ところが、夢で警告され」 → 「退いて行った」

13 節 「退いて行った」 → 「主の使いが夢でヨセフに現れ」

22 節 「ところが、夢で警告され」 → 「ガリラヤ地方に退いて行った」

23 節 「ナザレという町に行って～」 → 「預言の定型句」

## 3. 補遺 預言 2:23

23 節の「預言の成就」は 22 節の「夢」のすぐ後に続いて、ガリラヤ地方という広域からナザレという狭域の町へと場所の設定がなされており、地理的に連繋している。しかし 先に述べたように、2 章後半全体の統合的な文学的構造からは、23 節ははみ出したかたちで書かれている。おそらく編集の最終段階においてここに組み込まれたものと思われるが<sup>26</sup>、それはマタイ福音書全体の文脈で見ると理解できる。すなわち、23 節の預言の定型句は、先にはイエス誕生告知の 1:22-23 と、後にはイエスのガリラヤ宣教の 4:14-15 の預言の定型句と連繋するからである<sup>27</sup>。

<sup>25</sup> 新共同訳は両者を「夢でお告げがあったので」と訳し、2:13,19を「夢で現れて」と区別して訳す。

<sup>26</sup> R.E.ブラウンは 22-23 節を補足と考える。前掲書 209 頁参照。

<sup>27</sup> 2:22-23aと4:12-13の類似点については、橋本滋男、前掲書40-41頁参照。

## I. 預言の成就 ①

定型句 1:22 主が預言者を通して言われたことが成就するためであった。

預言 1:23 その子の名を人々はインマヌエルと呼ぶだろう。

## II. 預言の成就 ②

成就 2:22-23a と聞き、ガリラヤ地方に退き、ナザレ～町に～住んだ。

定型句 2:23b 預言者たちを通して言われて～が成就するためであった。

預言 2:23b 彼はナザレの人と呼ばれるだろう<sup>28</sup>。

## III. 預言の成就 ③

成就 4:12-13 と聞き、ガリラヤに退き、ナザレ～カファルナウムに住んだ。

定型句 4:14 預言者イザヤを通して言われ～が成就するためであった。

預言 4:15 異邦人のガリラヤ

1:23の「インマヌエルと呼ぶだろう」((καλέω.3 人称複数,能動未来形)<sup>29</sup>)は、2:23bの「ナザレの人と呼ばれるだろう」((καλέω.3 人称単数,受動未来形)につながり、2:22-23aの「ガリラヤ地方に退いて行って(ἀναχωρέω),ナザレと言われる町に行って住んだ(κατοικέω)」は、4:12-13の「ガリラヤに退いて行って(ἀναχωρέω),ナザレを離れ、～カファルナウムに住んだ(κατοικέω)」につながってゆく。ちょうど22:22-23は、両者の中間にあって前と後を橋渡しする役割を果たしている<sup>30</sup>。

預言の成就 ① 第一段階：イエスの誕生の時

1:23 その子の名を人々はインマヌエルと呼ぶだろう。

預言の成就 ② 第二段階：イエスの成長の時

2:23 彼はナザレの人と呼ばれるだろう<sup>31</sup>。

<sup>28</sup> 21:11には「この人は、ガリラヤのナザレから出た預言者のイエスだ」とある。これはエルサレムに入った時のことで、ここにおいて2:23の預言が成就する。

<sup>29</sup> インマヌエルの語は出て来ないが、マタイ福音書の最後の28:20で、「私はいつもあなたがたと共にいる」がこれに対応する。

<sup>30</sup> 動詞「退いて行く」(ἀνεχώρησεν)も、2:12(マギたち)、2:13,14(ヨセフ)、2:22(ヨセフ)、4:12(イエス)と連繋する。

<sup>27</sup> 21:11には「この人は、ガリラヤのナザレから出た預言者のイエスだ」とある。



2:23 ガリラヤ地方に退き、ナザレという町に～住んだ。

預言の成就 ③ 第三段階：イエスの活動の時

4:12 ガリラヤに退き、ナザレ～, カファルナウムに～住んだ。

### 5. 3. 全体の構成

以上、1章と2章での「夢の実現」と「預言の成就」を個別的に見たが、最後に1-2章全体を合わせて見ると、次のように構成されているというのがわかる。

X	1:20	夢での告知 (ヨセフ)	
[ I ]	1:22	預言の成就①	
外枠	2:12	夢での警告 (マギたち)	
内枠 A	2:13	夢での告知 (ヨセフ)	
中心 B	2:15		預言の成就
中心 B'	2:17		預言の成就
内枠 A'	2:19	夢での告知 (ヨセフ)	
外枠	2:22	夢での警告 (ヨセフ)	
[ II ]	2:23	預言の成就②	
	↓		
[ III ]	4:14	預言の成就③	

### まとめ

1. マタイ 1-2 章のイエスの誕生物語において、「夢での告知」が 4 回、「預言の成就」が 4 回出て来るが、場面場面でそれぞれが互いにきれいに結び合わされている。マタイ福音書は、全体で 10 回<sup>32</sup>出て来る「預言の成就」の定型句が基本的な骨組みを構築していると考えられるが、その最初の部分において大きな役割を果たすのが、預言の成就①、②、③である。

2. 次に大きな枠組を形成するのが、「夢での警告」である。ただこれは、はじ

<sup>32</sup> R.E.ブラウン前掲書98頁。W.F.Albright and C.S.Mann, *Matthew*(AB26;New York 1971)8. 但し、TDNT,vol.VI (p.295)は12回とする。

めはマギたちに対してのことであり、あとはヨセフに対してのことであり、人物が異なる。またヨセフにはこれに続いて「預言の成就」の定型句があるが、マギたちに対してはこれがない。マギたちは、旧約のヨセフの兄弟たちがヨセフにひれ伏したように、幼子イエスを拝み、その役割を果たして退場する。一方、新約のヨセフにはイエスとのかかわりで—ヨセフもダビドの子(1:20)—、「預言の成就」ということが強く打ち出される。ルカ福音書のマリアとは違ったかたちで、マタイ福音書のヨセフはイエスの預言の成就に深くかかわる。

3.中心部分は、ヨセフが夢で告知を受けて子供と母を連れてエジプトへ避難し、ヘロデが亡くなってから、また夢で告知を受けて戻って来るという話である<sup>33</sup>。この内枠の中心に「預言の成就」の定型句が二組、並列されている。ホセアとエレミヤの引用である。ホセアの「エジプトから私の子を呼んだ」(1:11)は、先の「その子をイエス/インマヌエルと呼びなさい/呼んだ」(1:21,23,25)、後の「ナザレの人と呼ばれる」(2:23)の真ん中であって、人間から呼ばれることではなく、神から呼ばれることが言われている。すなわち、ダビドの子、ユダヤ人の王は、神の子であるということが預言者を通してではあるが、神から—「主によって」—であると言われている<sup>34</sup>。

これを受け継ぐ真ん中の「ベトレヘムでの嬰兒殺害」(16-18)は、前半の真ん中「ユダの地、ベトレヘム」(5-6)に呼応する。エジプトへの避難は殺害の危険からのがれるためであったため、この記事が真ん中に置かれている。モーセ誕生の時には、エジプトで王の命によって嬰兒殺害がなされたのであるが、新しいモーセ、イエス誕生の際には、そこをのがれたベトレヘムでヘロデ王によって嬰兒殺害がなされる一言明はされていないが、エジプトで助かるというわ

<sup>33</sup> エジプト往還の最初の人物はアブラハム(創12:10-20)であるが、マタイ福音書のエジプト往還の記事は、ラケルの子ヨセフがエジプトに行き、モーセに引き連れられたイスラエルの民がエジプトから出るのを予型としていると考えられる。旧約聖書がエジプトを避難の場所としているのは、飢饉によるアブラムをはじめ、ソロモン王から逃れるハダド(王上11:17-20)、ヤロボアム(王上11:40)、さらにヨヤキム王から逃れるウリヤ(エレ26:21)などの場合がある。

<sup>34</sup> 夢では「主の使い」(1:20,24.2:13,19)

けである一。エレミヤ 31:15 の引用では、夢を見るヨセフの母、ラケルが登場する。ここで彼女はラマの地と関連づけられているが、ラケルの伝承は創 35:16-20 をはじめとしてエフラタ/ベトレヘムに深く結びつけられている<sup>35</sup>。そして前半の真ん中で引用されたミカ 5:1 の「ユダの地、ベトレヘム」からあらわれる指導者、イスラエルの牧者ダビドとつながる<sup>36</sup>。後半の真ん中(16-18)では、モーセとダビドの姿が背後にあって、イエスがダビドの子であり、新しいモーセであるということが暗示されている。

### エピローグ

イエスのベトレヘムでの誕生と、エジプトへの避難とそこからの帰還の物語は、「預言の成就」を縦糸とし、「夢での告知」を横糸として織りなされている。縦糸、横糸をほどいてみなければ、これがいかに巧みに織り上げられたものであるかわからないほどきれいに仕上げられている。マタイは旧約のヨセフを新約のヨセフの予型とし、夢が機縁となってエジプトに下る話を下敷きに、エジプトにのがれ、また戻ってくるという物語を書いている。ただマタイは、これが単に夢による告知の実行の話としてではなく、預言者によって言われていたことが成就したのものであると、夢と預言を結び合わせて書いている。夢と預言。それは旧約聖書においては、肯定的にも<sup>37</sup>否定的にも<sup>38</sup>語られているが、マタイは両者を肯定的に組み合わせて叙述する。旧約のヨセフの夢の実現—ひれ伏す—は、それとは知らずにエジプトにおいて実行されるのであるが、新約のヨセフの夢の実行—エジプトへの避難とそこからの帰還—は、預言者を通して言われていたことの成就であると明言する。

<sup>35</sup> 創35:19.48:7.ルツ4:11.但し、サム上10:2ではツェルツァ。

<sup>36</sup> 「指導者」はサム下5:2からの引用であるが、ダビドとベトレヘムの関係は、サム上16:1-13.17:12-15,58.20:6など多くの箇所で行われている。ラケルの伝承がベトレヘム、エフラタに結びつけられるのと同様、ダビドの伝承もベトレヘム、エフラタに結びつけられる。ルツ4:11-22等参照。

<sup>37</sup> 民12:6.サム上28:6,15.ヨエ3:1.使2:17.

<sup>38</sup> 申13:2-6.エレ23-25-28.29:8-9.

マタイ福音書の基本的なメッセージは、「私が来たのは律法や預言者を廃止するためだと思っはならない。廃止するためではなく、成就するためである」(5:17)と理解されるが、これをはさんで、この前に5回、この後に5回<sup>39</sup>、「預言者を通して言われていたことが成就するためであった」という「預言の成就」の定型句が福音書全体に配置されている。その最初の2回、イエスの誕生の時(1:23)と成長の時(2:23)は、ダビドの子ヨセフの「夢での告知」の実行が、「預言の成就」であるとされている。そしてイエスの活動の時(4:14)にはもはや「夢での告知」はなくなり、イエスその人に焦点を当てて「預言の成就」が言われるてゆくことになる<sup>40</sup>。

---

<sup>39</sup> 1:22. 2:15, 17, 23. 4:14←5:17→8:17. 12:17. 13:35. 21:4. 27:9. 但し、26:56はほぼ同様の定型句であるが、「言われていたこと」(τὸ ῥηθὲν)ではなく、「書いたこと(αἱ γραφαὶ)」であるので、ここでは「預言の成就」の定型句の数には含まないこととする。

<sup>40</sup> R.E.ブラウンは、ナザレのイエスは洗礼後、天の国の宣教を始める(4:17)わけであるが、その前にはその準備段階がなければならなかったと述べ、直前には3章の洗礼者ヨハネの活動があり、さらにその前には、律法と預言において語られた神の働きを記した1-2章があったとする。彼が嬰兒物語を旧約と新約が会う箇所として把握するのは正鵠を得ている。前掲書231頁参照。